

(17)2 度のカルチャーショック

051502 締め切り 043002 提出

阿岸鉄三

一回目のカルチャーショック

正確な定義は兎に角として、カルチャーショックという言葉があります。わたしは、自分の人生で2回の強烈なカルチャーショックを経験したと思っています。一回目は、1965年、30才のときに留学でアメリカへ行ったときです。そして、二回目は、1995年頃、60才頃から受けている外気功とそれに関連した代替・補完・伝統医療のパラダイムに接触してからです。

まず、アメリカ文化に接した頃の思い出です。1965年頃、日本は第二次世界大戦からそこそこの復旧状態にあったと言っていいでしょう。わたしは、札幌に住んでいて、結婚して3日目に羽田からアメリカのジョージア州アトランタ市に向けて飛び立ちました。アメ

リカ本土への直行便はなく、ハワイで一泊しなくてはならない飛行機でした。初めてのハワイは、本当に極楽天国のようでした。トリスを飲んでハワイへ行こうの時代が始まっていたと思いますが、1ドル360円の世界でしたから、やはりまだまだ、ハワイも珍しかったのです。いま考えてみて、なにが、どう違ったかと聞かれても返事に困るのですが、見るもの、聞くものがすべて珍しかったのです。風になびく椰子の木に沢山の実はなっているのを見て、えらく感激したのを覚えています。ロスアンゼルスでまた泊って、飛行機を乗り換えてアトランタに向かいました。飛行機の持続航行距離が短くて、燃料を補給しながらでないとはどり着けなかったのです。ジョージア州の空まで行ったとき、ビックリ。地面が真っ赤なのです。札幌の駅前に、赤煉瓦作りの五番館というデパートがありましたが、その赤煉瓦を崩してぶちまけたような有様が、えんえんと広がっていたのです。

アトランタ市のエモリー大学に留学したのですが、ボスが取りあえずということで大学構内のアパートに部屋を借りていてくれました。ワンルームでしたが、当時のわれわれの感覚では十分満足ものでした。嬉しく、ビックリだったのは、蛇口をひねるとお湯がいくらでも出てくることでした。当時の日本では、アパートを含めた個人の住宅でひねってお湯の出る家はほとんどなかったと思います。大学の動物実験用の研究室には、ほぼ各室に血圧・血流量測定を基本とするポリグラフ装置がありました。わたしの記憶では、当時北大病院でポリグラフ装置を持っていたのは、麻酔科だけで、血流計については、応用電気研究所の人たちが電磁流量計のコイルを手巻きで巻いて試作していたような状況でした。実験の報告は、フィルム状の録音シートに直接ディクテーションして吹き込むのです。翌日には、秘書がタイプしたものが出来上がってくる仕掛けでした。これは、仕事の効率が上

がります。わたしは、勿論そんなことは出来ませんから、自分でタイプして、研究室のアメリカ人に英語をチェックしてもらい、ディクテーションしていました。大学の事務室へいくと、各机に電動のIBMタイプライターを載せて仕事しています。ここでも、仕事の速さに驚かされました。日本字のタイプライターは、漢字の活字を一つずつ拾ってガッチャンでしたから、、、。日本で、多くの人がパソコンを使ってどんどん仕事をするようになったのは、1990年代半ば以降でないでしょうか。30年前にこの光景が、アメリカであったのです。そして心に浮かんだのは、日本の軍部の人たちが、本当に戦争に勝つつもりでこの国と戦ったのかという、極めて素朴な疑問でした。

二回目のカルチャーショック

そして、およそ30年後、オウム事件のあった頃ですから、1995年のことだったと思います。

外気功と出会いました。代替・相補・伝統・民間医療というものの存在は知っていましたが、別世界のことと置いていたというより、まったく、視野の外というか、考慮の対象に入っていませんでした。それらの中で、例えば、漢方薬なら、服用することによる薬理作用、鍼なら、経絡・経穴の存在は別にして、身体に何らかの物理的刺激が加わるというようなことで医療的効果が起こることは、一応、理解の内と置いて良いでしょう。しかし、外気功となると、これは理解の外です。両手のひらを患者の側頭部にかざすと、患者の心身に反応が起こるなんて信じられませんでした。しかも、わたしは自分自身、そうしたことから一番遠いところにいる人と思っていたのに、試みに気功師に手をかざしてもらおうと、あるうことか、体が大きく揺れ、もの凄く気持ちが悪くなったのです。さらに驚くべきことに、いまや、自分が気功師になって患者に外気功を施しているなんて、本当に信じられません。

でも、考えてみると、小さい子供が頭をゴンとぶつけて痛がるとお母さんが、手を当ててあげて、「痛い痛い飛んでけえ」とやるのは、それなりに効果があるのであろうし、お腹が痛かったりすると自分で、あるいは他の人に手を当ててもらおうと楽になるような気になるし、第一、手当は外科治療の原点なのではないかと考えられます。そんなことは、近代科学に根ざしたと称する現代医学、あるいは生理学の教科書・成書には、記載はないのです。庶民は、現実を厳しく見て、意外と、適切に評価しています。わたしの処世訓に、「世間を甘く見るな」というのがあります。普段は、あまり反応が良くなくて、つい、甘く見る、ときには勢い余って無視すると、世間は必ず強烈なしっぺ返しをします。日本的な、右を見て、左を見て、みんな揃ってというのは、わたしの好まないやり方なのですが、わが身の安全のためには従わざるを得ないのです。

ところで、生理学の本に書いてなくても、

現象として起こるものは、認めざるを得ないと考えていたのですが、大学で定年を迎えた研究者の端くれとして、気とは、気功とはというに俄然興味が起こってきました。現代医学の図書館、現代医学の発表論文などには、ほとんど参考になるものはありません。巷の書店の比較的新しく出版されたものから選ぶということになります。関係あるような、ないような、周辺領域の出版物を読んでビックリしました。結論から先にいうと、「科学的ということだけが、この世を律する論理でない」ということをいう人たちがいたのです。現代世界は、科学的といえ、すべてがまかり通るような科学教という宗教に支配されている、というのです。いってみると、みんながマインドコントロールされている。科学的でないということから、存在価値もないようなことではないというのです。そんなことをいわれたって、自分のことでいうと、60年間も科学的であることを唯一の規範とする文化的枠組

み - パラダイム - のなかで、教育を受け、ものを考えてきたのに、そんな、、とと思いました。しかし、大学を卒業して会社に入ると、会社によっては、数ヶ月の研修をします。これは、会社人間にするためのマインドコントロールなのでしょう。戦争中には、一致団結して滅私奉公し、だめなら一億玉砕するのです。そして、敗戦を迎え、あっと気がついて、ほかのパラダイムもあると分かると、以前のパラダイムを先導した人たちを猛烈に批判・非難するのです。これが群を作って生活する動物としてのヒトの基本的な生き方なので。 「科学的」以外のパラダイムが存在するなんて、ショックでした。

挿し絵：8月の北部イングランドの風景です。何百年も経たと思われる石積みの家とはるか遠くの野山までを仕切る羊用の囲い。人手をかけた結果のはずですが、不思議な自然感と穏やかさがただよっていました。

